令和4年度播磨町自主防災組織合同研修会
コロナ禍(後)での自主防災活動について

問 危機管理課☎079-435-0991

令和4年12月11日の10時30分～12時に、中央公民館大ホールで、神戸学院大学現代社会学部社会防災学科教授の安富信さんをお招きして、令和4年度播磨町自主防災組織合同研修会を実施しました。

町内の自主防災組織や消防団など68人が講演を聞き、自らの住む地域でのコロナ禍での避難や防災活動の在り方について、考えました。

講演の内容を抜粋して、お伝えします。

○はじめに

播磨町というところには、初めて来るかなと実は思っていました。ところが、50年ほど前に来たことがありました。中学生のころに来た覚えがあります。当時は本当に田舎だったと思いますが、今は豊かになっていました。

私は、神戸市灘区の生まれですが、調べてみたところ播磨町は、灘区と同じくらいの人口密度です。非常に災害に弱い、強くないかもしれませんということを思いながら、今日のお話に入っていきます。

○コロナの自主防災活動への影響

コロナで自主防災活動3年間できませんでした。どこもそうです。ただ、気付いたことがあります。災害もそうですが、感染症が起こった時も、日本人は「想定外だ」と言います。そういって、準備をしていない。特に最初の1年、2年はすごく厳しい、例えば家から出るなとかソーシャルディスタンスで近づくななどという状況になったとき、大事なことは人と人とのつながりだということを感じたと思います。コロナによって、そういうのがとても大事だと気づいたということは、私はコロナが教えてくれた新しい良いことだと思っています。

災害時、大事なことはまず家族の安否確認。それができて、次は自分の親戚やご近所のことになります。自主防災で一番大事な共助というところですが、隣近所で助け合う、それもできるだけ小さな単位で助け合うことを考えます。まずは元気な人が寝たきりのお年寄りをどう助けるのか、障がいがある方はどうしようかなどのことを考えるのが大事です。

○自主防災活動のはじめ

今年、兵庫県下で唯一この播磨町だけが避難指示を出しました。9月19日、休みの日でしたが、避難指示を発令し、対象世帯7262世帯、対象人数15，793人。「何人避難したのだろう」と、私は関心を寄せたところ避難した人は55人でした。「それはそうだろう」と思いました。これが日本の現状です。0・5%です。

西日本豪雨の際、岡山県倉敷市真備町岡田地区で、なぜ人々は避難をしなかったのかという調査をしました。「大丈夫だと思った」という回答が多くありました。岡田地区は比較的川から離れた安全なところで、逃げてくる人がいるだろうと岡田地区の人は炊き出しなどをしていました。炊き出しも終わって家に帰っているころ、川の水が流れてきて、8人が亡くなりました。少し変わった例なのですが、自分たちのところまで被害が及ぶという想定がなかったので、自分は大丈夫だと思ったとのことです。

その後、この町はものすごい防災マップを作っています。防災マップなんかは、冷蔵庫とかに貼っておくべきです。真備町でも防災マップどおりに浸水して、なのに逃げない人が多くいたため、50人ほどの人が亡くなっています。役所が一生懸命防災マップを作っていても、見てもらわないと何も意味がないのです。

三田市では、森崎先生という方が「自分たちで自分の街を見て、歩いて、ハザードマップを作りなさい」と言っていました。三田市は今、90地区あるうち50地区ぐらいのマップを作っています。自分たちでマップを作ると、ちゃんと自分たちで考えます。「あそこの川が溢れたら、危ない、逃げないといけない」と考えます。すると、逃げる場所についても防災マップに記載します。それを活用して訓練するのが一番良いのです。

ですが、訓練はだいたい天気の良い日にして、対象者が300人いたとしたら30人来たら「よく来たな」というのが現実ですよね。

ここは、かなり厳しい案ではありますが、台風が来たときに訓練をすることをお勧めします。チャンスです。台風であれば、電車が運休します。会社に行かなくていい。こういう時に、大雨が降ってくる前に「訓練しましょう」ということで小学校へ避難する。この道は通れなくなっているだとか、様々な気づきを得られます。このように、台風のタイミングで訓練をしてみるというのもひとつの考え方です。それが、自主防災活動の最初だと思います。訓練というのは行けない箇所を見つけることなので、「この道は危ない」と気付けば町、県などに要望することもできます。

○災害の時のためのコミュニティづくり

私は災害情報を研究していますが、学生に授業をする際に毎回伝えているのは、「災害情報とは命を守る情報である。これが上手くいかないと命を助けられない」と伝えています。行政の方から避難の情報が出ているのに、避難しなかった人がいたとしたら、行政としては命を守れなかったということになります。

そういった事例が多々あります。それが災害情報の一番難しいところです。「うちは大丈夫」と考えるのは日本人独特の考え方です。

西日本豪雨の際に逃げなかった人がいました。結局水が来て、消防の人にボートで救助された映像がありました。それがこの人たちの反省に繋がり、LINEで20件ぐらいの連絡網を作りました。難しいところから始めても無理です。LINEで連絡網を作るなど、まずは、隣近所と連絡を取り合うことが、平時の準備です。

災害が起きたらどうやって助け合うのか、というところからもう一度コミュニティを作り直しましょう。昔ながらのコミュニティではなくて、災害が来ることを見越したコミュニティづくりを今から始めてはいかがでしょうか。大事なことは「小さなことからはじめましょう」ということです。

○災害時に活躍できる自主防災組織を

自主防災会というものは何かというと、阪神淡路大震災があり、「隣近所の助け合いがない」と言われ、兵庫県が「自主防災組織」を作って、皆で助け合う組織を作りなさいという風な流れで出来たものです。今から20何年前の話です。

そんなことを言われてもどうやって作るのかとか分かりませんよね。それで町内会ごとに自主防災組織を作ったわけですね。

自治会長や町内会で役員さんが自主防災会会長となっています。それが実態です。ここ最近になって調べてみると、2020年4月1日現在、全国1740市区町村のうち1588が組織されている。組織率84%。立派ですよね。この数字だけ見たら、南海トラフ巨大地震が来ても大丈夫と思いますか。名前だけになっています。簡単に言うと、この組織率84%の自主防災会というのは、絵に描いた餅だと思います。

兵庫県の自主防災組織の組織率は100%ですね。三田市も自主防災組織の組織率は100%です。

でも、上手くいってるかというと、全然うまくいってなかったです。私の自治会も自主防災組織を作りました。ほとんど実態として動いてないので、私が、「こんなんでは、全然うまくいきませんよ」「5～6人の本当に興味のある人が自主防災組織のコアとなって始めましょう」と話して活動を始めました。普通の人は「防災なんか難しいしおもしろくないし、邪魔くさい」というのがほとんどです。町内会の餅まきの時に、自主防災組織で豚汁などを炊き出しをしました。もちろん、自主防災活動にはお金も必要ですので、当時の町内会長さんにお話しをしたところ、その時の町内会長さんは防災に熱心な人で、いくらか予算をつけてくれました。その次の町内会長さんは防災に興味がない人で予算を削られ、その時の町内会長によって、予算は変わりました。中身のあるものにしようと思えば、それぐらい戦いながらしないと、形だけ作って年に1回大きく訓練だけ終わって、「よかった」ではダメだと思います。

また、災害時に使える人材はもちろん私たちの世代60歳前後の人たちと、中学生ぐらいの人が1番使えます。現役世代は仕事で外へ出てしまっていたりするため、難しいですよね。なので、自主防災活動に中学生とコラボというのは大事です。これには学校の先生の理解が進まないといけません。もちろん高校生でもいいです。災害時に町内にいる人材を活用していく、そういうことを考えておかないといけません。

○防災教育について

防災教育の人たちは、子どもたちから防災教育を始めていきます。出前講座などで紙芝居をすると、家に帰ってから「こんなことを教えてもらった」と親に話します。「ここらへんも水が溢れたら危ないみたい」といったような話をすると、親は子どもの話なのでちゃんと聞きますよね。そうして、だんだんと防災教育というものが広まっていくということに繋がります。

○最後に

災害は必ず社会がその時に持っている弱点を突いてきます。阪神淡路大震災の時には、戦後に続けて建てた家が潰れて、5000人ぐらいがその下敷きになって亡くなったといわれています。新型コロナの時には、もしその時に災害が起こっていれば避難所をどうするんだというような弱点が見えてきた。避難所での感染症対策ですね。今までの避難所運営ではダメだということが分かりました。